

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二·一第 卷八十五第

高田博士還曆記念論文集

行發月二年九十和昭

中國國民革命の性格について

出口勇藏

中國において近代的な意味に於ける革命事業が孫文を中心とする革命運動とともに創められたことは、疑ひないところである。まうしてその事業が未だ完成されることなくして日支事變となり、更にはヨーロッパにおける第二次の大戦の勃發とともに、東洋とヨーロッパとの戦局が東西相呼應して、眞の意味における世界大戦の大東亞戦線とヨーロッパ戦線とを形成してゐることは、人々の等しく認めるところであらう。地球の全表面に樞軸國と反樞軸國とがそれぞれ配置されることによつて、ヨーロッパ戦線にも大東亞戦線にも、おのおの東西の二つの戦線が展開せられてゐる。少數の絶對中立國を除き、殆どすべての民族は、この戦局において樞軸側か反樞軸側かの何れかに立つてその立場を明白にしなくてはならなくなつてゐる。一民族が統一的な旗幟を掲げえないところでは、その内部において樞軸側と反樞軸側との分裂が起つてゐる。中國民族は、フランスやイタリーとともに、その一例なのである。しかも中國民族の民族的分裂をフランスやイタリーにおけるそれと異らしめてゐるものは、この民族が、ヨーロッパ諸民族とちがつて、近代革命を未だ完成してをらず、近代國家としての民族の自己限定を行ひえないままに、遂に近代社會の末期的現象である世界大戦の渦中に身を投じてゐると云ふことである。南京政府と重慶政府との分裂は、フランス民族のヴィシー政権と自由フランスとの分裂やイタリー民族にお

けるファッショ政權とパドリオ政權との分裂と直ちに等しく論ぜらるべきではないのである。ここに人々は中國の國民革命がヨーロッパ諸民族の近代革命と等しく論ずることを得ない性格を有つてゐることに、氣付くことであらう。しからばこの性格の相違は何に基くのであらうか。

その一つの理由は、中國社會のいな更に廣く東洋社會の後進性に求められるであらう。ヨーロッパ諸民族の近代革命がマイネツケの所謂「千七百八十九年の精神」に基くと云ふことを承認するとするならば、ヨーロッパ諸民族の國民革命の性格は、十八世紀および十九世紀の歴史的現實の場所において、見究められる。之に反して、東洋民族の近代革命は十九世紀において完成せず、世界史の現狀に係はつていまだにその生みの悩みを續けてゐるのである。それゆゑ、東洋に於ける國民革命を論ずる者は、眼を十九世紀に限ることなく、更に世界史の現狀にまで視野を擴大する用意がなくてはならない。

だがこれだけの用意を以つてするならば、東洋民族の近代革命の性格は、ヨーロッパのそれとひき比べて、論じ盡されるであらうか。東洋社會の後進性と云ふ場合には、ヨーロッパ社會を規準として、それに先進性を刻印し、それに對して東洋社會を後進性と稱してゐるのであつて、この呼稱の裡には社會史を唯一つの直線として見る見方が藏されてゐることが否なまれない。果たして社會史は一つの線を辿るものとして把べられるであらうか。むしろ、東亞社會とその歴史にはそれに獨特の構造類型と發展類型とがあつて、この社會をヨーロッパ社會と對立せしめてをり、社會史は一つの線をではなく、多くの線を辿つて展開され來たつたし、將來も亦さうであらう、と云ふ見方の方が一層具體的であるらしく思へるのである。また東亞社會の中でも、既に十九世紀において、とにかくにも外貌としては、ヨーロッパ的な近代社會への展開を終へてしまつた我が民族のごときものもあ

1) F. Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat 邦譯、獨逸國民國家發生の研究、6頁。

ることを思へば、中國と我國とを同列に論じ難いことも深く顧みなければならぬのであつて、一概に東亞社會と云ひ東亞民族の國民革命の類型を求めようとしても、それは事態の真相に迫りうるものではないであらう。

にも拘らず、孫文の革命思想や革命運動を通覽するに、ヨーロッパ諸民族の近代革命と比べて著しい特色が看考取されるのであつて、その特色が、孫文以後現在に至るまで、中國國民革命の性格を本質的に物語つてゐる、とへられる。ここに孫文における特色を論じて、中國國民革命の性格を明かにする一助としたいと思ふのである。

二

ここに國民革命と云ふのは、民族が近代的な存在様式として取る形としての民族國家を形成するに當つて、それ以前の封建的乃至は絕對主義的社會秩序との間に通過せざるを得ない争鬭を總括的に指す。この争鬭は民族生活の各領域において行はれる。經濟生活はもとより、文化の諸相や宗教生活に至るまで、何等かの形の争鬭が見られるはずである。しかし我々はその争鬭の集中的表現を政治的争鬭の中に見いだすのでなければならぬであらう。國民革命は政治革命を頂點とし、政治的生活以外の生活領域における變化や舊體制との争鬭は、ただ政治革命のために行はれるだけの第二次的、附隨的な意味をしか有たないものでは決してないにしても、政治革命に對する物質的、理念的な準備過程となるものであり、政治革命の完成とともに、それらは現實に民族的生命の表現として強固な地盤を與へられて一層の發展を期しうるものであらう。最近の社會學者たとへばガイゲルやモイゼルは、革命をば政治革命とのみ論じたのは十九世紀の狭き偏見によるものであるとして、社會學的なる革命概念を、或る歴史的社會の基礎一般の、およびそのすべての個々の部分、現象、創造物における基本的なる革命概念を、²⁾「社會秩序の改鑄」と云ひ換へようとしたりして、³⁾一般に革命の意味を廣義に理解しようとしてゐる

2) T. Geiger, Revolution (Handwörterbuch der Soziologie, S. 512.)

3) A. Meusel, Revolution and Counter-Revolution (Encyclopaedia of Social Sciences, Vol. 13, p. 367).

やうに見える。之は文化社會學的な最近の一風潮の然らしめるところであらうけれども、かく廣義に革命を理解することは、社會史の動的考察をただ政治史的にのみ限る偏見は避けられるとしても、社會生活の諸領域の變動が聯關し合つて一つの潮流となつて歴史をつくつて行く姿は、この立場からは把へえないのではないか、と思はれる。各文化領域における變動がそれぞれ相對的に獨立な固有の變動を示すにしても、それらが相寄つて社會生活全般の變革をもたらし、それぞれ獨自の立場を強固にするのは、常に政治革命を通してである、と云はなければなるまい。十九世紀において政治革命に過大な關心が寄せられたのは事實であるとしても、政治革命において革命一般はその集中的表現を有つと云ふことは、承認される必要があるであらう。

次に、近代國民革命の精神として、わたくしはマイネッケの云ふところの「千七百八十九年の精神」を掲げておきたい。それは「國民の自治と主權、換言すればその政治的制度を自ら形成し、その政治的運命を自ら導かんとする國家國民の思想」である。政治革命は民族生活の全領域に於ける變革の集中的表現であるから、それは單に政治組織のみの變革にとどまるものではなく、經濟組織をはじめ、各文化生活の様態の變革をも隨伴して、政治革命によつて民族が歴史的に新たな時代へと進み行くのである。だから國民革命の名の下に總括せられる民族社會の變革の中には、民族の獨立自存のための争闘、新しい政治組織確立のための争闘、新しい經濟組織樹立のための争闘、民族文化の刷新のための努力などが含まれるのである。孫文が中國における以前の革命運動と自らの革命運動とを區別するに當り、しばしば「三民主義と五權憲法との革命」と云ふ言葉を以つて自己の立場を特徴づけたことは、周知の事實である。三民主義が民有、民治、民享を旨指すところの民族主義、民權主義、民主主義の三つの理論から成つてゐて、民有、民治、民享の三者がリンカーンの有名な言葉としての

4) Meinecke, ibid. (邦譯、同掲、同頁)。

government of the people, by the people, for the people から考へ付かれたものであることは、孫文がみづから述べてゐる通りであつて、そこには「千七百八十九年の精神」が脈々として波打つてゐるのである。民族主義は中國民族の解放、獨立を目指す民族革命のための精神的武器であり、民権主義は中國民族が近代的な立憲政治を樹立する狭義の政治革命のための理論であり、民生主義は傳統的な中國社會を變革すべき社會革命のための理念と方策とを含んでゐる。また五權憲法とは、モンテスキューの三權分立説に基いて成つたアメリカの憲法に倦き足なかつた孫文が中國民族獨自のものとして創案した新中國國家の組織法に外ならない。さうして中國の文化の高揚に關しては、孫文は辛亥革命以後の革命運動の苦き體驗を省めるとともに、その必要を痛感したのであつて、彼の哲學と云ふべき知難行易の説は正に中國における文化革命の烽火をあげたものと云ふことができる。五・四運動の直前より北京を中心として起つた新文化運動が孫文の革命運動に刺戟せられたところが多かつたことも否まれぬ事實である。

かやうに、孫文の革命思想と革命運動とは、正に近代的國民革命と名づけるに相應しい内容を備へてゐる。しからばそこに中國的な性格がいかなるものとして指摘されうるであらうか。

三

中國の國民革命の性格を論ずるに當つて、ヨーロッパの國民革命に見られる一般的特徴とその性格とをそれに對比せしめることをゆるされたい。ヨーロッパに於ける諸民族の有つた種々なる國民革命を通じて一般的に安當することは、ヨーロッパ諸民族がおのの民族國家を形成し近代的な國家國民となる以前に、既に文化國民 Kulturation としての存在を有つたと云ふことである。ここに文化國民とは先づ第一に、共通の言語、共同の文

5) 詳細は近く刊行するべき「東亞人文學報」第三卷、第三號、における拙稿「孫文の民族主義について」を参照されんことをのぞむ。

學および共同の宗教などの文化財を有つてゐる民族であつた、と云ふことである。だがこの規定だけならば、中國民族こそ、ヨーロッパ諸民族に比べて一層優れて文化國民であつた、と云はれなくてはならないであらう。中國民族はヨーロッパ諸民族よりも遙かに以前より、獨特の偉大な文化の所有者であつた。またそれを保持して來たからである。ここに云ふ文化國民の第二の規定として必要であるのは、その文化が近世的な自覺を有つた個人によつて擔はれ且つ創造されてゐると云ふことである。すなはちヨーロッパの諸民族は國民國家の形成に先んじて個人主義的活動の時代を有ち、民族の文化は自覺的な個人によつて擔はれ、文化はその個人より成る *civil society* の中で積極的に育成されて來たのである。個人は民族の文化を積極的に培ふことによつて、世界市民 *Weltbürger* となることができたのである。ところでこのやうな個人主義的な文化擔當者をば中國は有たなかつたと云はなければならぬであらう。中國の文化がいかに輝かしくとも、それは王朝や士大夫達をその擔當者として有つたのであつて、市民社會において積極的に培はれたと考へることはできない。

この文化國民が他の文化國民に對立して生活の全體をば自己限定の下に統一しようとすると、國家國民となり、近世的な國家を形成しようとする勢を示すのである。ヨーロッパにおいては、個人主義的活動の時代が先行し、市民社會的環境が以前の封建的乃至絕對主義的國家體制の外部において確乎たる地盤を形成してゐたがゆゑに、古き政治體制を變革して民族の自律的存在を獲得しようとした時には、市民社會に關はつてゐた個人の個人主義的な情熱が與かり働かざるを得なかつた。封建的勢力が市民社會に關はりを有つときそこに貴族的個人主義が現れ、市民社會の内部では民主的個人主義が擡頭して、それらがあるひは相共にあるひは敵對し合つて、民族的統一を遂げようとするところに、ヨーロッパの國民革命の一般的性格があるのである。のみならず、個人主義

的な革命の情熱が貴族的個人主義に由來するかそれとも民主的個人主義より出づるかに従つて、ヨーロッパの國民革命は類型化されるのである。前者による革命の類型を「上からの革命」Revolution von obenと呼び、後者に「よるそれを」下からの革命」Revolution von unten」と名づけることが、從來からの習はしてあるやうに思はれる。上からの革命の類型を示してゐるのはドイツにおける十九世紀前半期の改革および革命であり、下からの革命の類型はフランス大革命によつて最も顯著に見られることは、詳しく論ずる必要はないであらう〔註〕。尤もヨーロッパにおけるすべての革命が皆これら二つの類型のいづれかに屬してゐる、と云ふのではない。例へばフランスの二月革命(千八百四十八年)について、その千八百五十一年十一月までの経過が下からの革命に屬し、ルキ・ボナパルトのクーデター以後は上からの革命であつたと云ふ分析を加へる人もあるやうに、一つの革命が双方の類型をその経過において有つと云ふことも在りうる。またイギリスの國民革命については、フランスやドイツにおいて見られるやうな單純な類型化を以つてその全内容を把へえない獨特の複雑さがあると云はなければならぬであらう。併しながら、總じてヨーロッパの國民革命はいづれも、上記の二つの類型とその組合せを以つて把へえるものである、と云つてよいであらう。その然る所以のものは、國民革命が起る情勢の下にあつたヨーロッパの社會においては、市民社會における個人の自覺が或は經濟生活の日々の實踐と結びつき、或は啓蒙的な知識階級の頭腦の裡に、既に育成されてゐて、民主的な個人主義か貴族的な個人主義によつて革命理念が見いだされたために、國民革命は市民社會の一層の發展を圖ると云ふ共通の目標を有ち、ただその當面の實踐擔當者が封建的な出生を有つ者であつたか、それとも市民社會自體の胎内から生れ出でた者であつたか、の二つの可能性しか在りえなかつたからである。さうしてその後者が實踐擔當者となつた場合には、市民社會に固有な構造に基いて、

ブルジョワ民主主義とプロレタリア民主主義との抱合ひと對立との事情から、國民革命は一層複雑な現象を呈して來たのであつた。

〔註〕わたくしは上からの革命と下からの革命とかの普通に用ひられる概念が誰に出づるものであるかを審かにするものではない。森岡の及ぶところ、プロイセンの宰相ヘルデンベルヒがプロイセン王フリードリッヒ・ウィリアム三世に向つて、「陛下、我々はフランス人が下から仕上げた事柄をば上から爲なければなりません」と言上したと傳へられるのを知るのみである (G. P. Cochr, Nationalism, 1921, p. 13)。こゝに記して讀者によつて啓蒙されることを望むと云爾。尙ほ革命の類型化については、ゾムバートの試みがある。彼は實證的にヨーロッパ各國の社會運動を研究して、イギリス型、フランス型、ドイツ型の三つの類型に分かたうとしてゐる (Vgl. W. Sombart, Socialisms und Soziale Bewegung, 8. Auflage, S. 209 ff.)。しかしこの類型化は理論的には未だ不十分だと云はなくてはならない。

四

國民革命をば「上から」と「下から」との二つの類型に分かつことが、ヨーロッパの諸民族について妥當すると云ふことが承認を受けるとするならば、孫文の革命運動はこれらの類型の何れかに屬するであらうか。我々はこれに肯定的な答を與へることはできない。何故なら、孫文の革命思想の生成と革命運動の經過とを知るものは、次の事柄が明瞭であるべきだからである。

第一に、三民主義の生成は、傳統的な中國の社會や思想に對して激しい嫌惡を感じ、ハワイやアメリカの近代民主主義的な生活環境の下に始めて生き甲斐を感じた、文字通りの意味におけるモダン・ボーイであつた孫文が、祖國の支配者層の無能と先進諸國による瓜分の危険とを目の當りに見て、祖國の復興は先づアメリカのやうな近代民主主義的國家になることによつてのみ望みえられる、と直觀したところからはじまつたのである。彼の革命意欲は、彼が「中國問題の眞の解決」の末尾に率直に述べてゐるやうに、アメリカ合衆國の驥尾に附して進み

6) 孫文の民族主義については前掲の拙稿を、民主主義については、拙稿「民主主義の解明」(東亞人文學報、第二卷、第一號)および近く公けにさるべき、東亞經濟論叢誌上の拙稿「孫文の民主主義」を参照せられたい。詳細な敘述はそれらにゆづつて本稿では繰返して述べない。

うる國家を中國民族から形成することであつた。彼が歐米諸國を遍歴して遂に革命理論を組織的に三民主義として展開したのも、全くヨーロッパ的な社會思想の選擇とその攝取の下においてであつて、中國の傳統思想とのつながりは未だも認められない。彼の革命の理念はその内容から見て全く外來的であり、中國社會および中國思想との全き遊離の關係を有つてゐた。

革命の理念が全く外來的であつたことは、しかし、孫文の場合に限つたことではないであらう。ヨーロッパにおいても、例へばドイツにおいてさへ、「千七百八十九年の精神」は具體的には外來的であつた、と考へらるべきである。また現實からの遊離と云ふことを過去との非連続と云ふ意味に解すれば、この非連続性が一面にあればこそ、革命の理念となりうると云はなければならないのであつて、この點から見ても直ちに孫文の思想の性格を見定めるわけにはゆかないのである。我國の大化の改新や明治維新の鴻業の跡を顧みても、この外來性と過去からの連続性の排棄は、實踐理念の一つの特色であることを思はなければならない。孫文にはじまる中國國民革命の性格は、單に實踐目標を見ることがよつてではなく、更にその目標達成のための諸方策を吟味して、それらの中國の現實との結びつきを見究めることなしには、顯はになるものではない。蓋しかくしてこそ革命の理論は實踐的なるものとして認識されるからである。

例を民族主義に取つて云はう。孫文は、中國社會の紐帶は家族および宗族であつたが、それを更に擴大して國族にまで高めるべきである、とすることを以つて、民族主義の主張の内容とした。この實踐目標はまことに民族主義に相應しいものであるにちがひない。しかしながら、家族や宗族から國族への擴大はいかにして可能であるであらうか。ヨーロッパの現實とそこに生じた思想とが教示深く物語つてゐるやうに、家族や宗族からの國族へ

の擴大のためには、市民社會と云ふ媒介の項が必要なのである。市民社會は個人をば家族のきつなから自由にするることによつて家族の封鎖性を否定し、一層大きな社會團體の成立の可能性を開拓するものである。市民社會そのものは本質的に開放的であり、それとの民族の封鎖性との係はりにおいて、新しい大きな封鎖的な團體がすなはち近代國家が、民族的な大いさにおいて生成するのである。このことは單にヨーロッパについてだけ妥當する原理であるにとどまらず、凡て社會について一般的に妥當する眞理でなければならぬ。孫文の民族主義の理論はこの點を全く無視してゐる、と云ふ外はない。もしも、家族から國族への擴大に際して市民社會の否定的媒介が必要であることを彼が認識しえてゐたならば、彼の民族主義の理論は、單に實踐目標を掲げることとどまらずして、中國の現實との結合をより一層考慮して實踐の方策をば展開してゐなくてはならなかつたはずである。民主主義の理論における平均地權論と節制資本論についても、同様の事態が指摘されなくてはならぬ。ヘンリー・チョージの單稅論とピスマルクの資本主義保育政策とから外來的に導き出されたこれらの理論は、中國の現實と結びつきうる地盤を見いだしえなかつた空中の樓閣であり、中國社會において適用の可能性を全然有たないものであつたのである。かくて、彼の革命理論は思想的な外來性と現實的な遊離性とを著しい特色として有つてゐる、と云ふことができる。

この特色を如實に示してゐるものが、孫文が關係した中國の革命の經過そのものに他ならない。ここに辛亥革命と孫文との關係を見よう。當時孫文はアメリカにあつて革命資金の調達と主義の宣傳とに没頭してゐた。さうして辛亥革命そのものは彼の指導の下に決行されたものではなかつた。それは中支において清朝打倒を以つて革命の目的とした會黨的な色彩の濃厚な革命團體が、盛宜僕の獻策した鐵道國有問題を動因として、四川省をばじ

め各地において、反抗の烽火を擧げてゐたが、武昌における烽起の企圖が漏洩するや、少數の革命家が蹶起し、たまたま清朝に忠誠なるべき軍隊の寢返りによつて、實にアツ氣なく成功を見、武漢三鎮が革命黨の手に歸するや、殆ど全國の民衆がそれに呼應することによつて、劃期的な革命となつたものであつて、その成功は清朝衰亡の必然性を證すべく、革命同盟會の奮闘の功と稱すべきものではなかつたのである。孫文が自傳において書いてゐるやうに、辛亥革命は彼には意想外の成功と云ふ外はなかつた。彼は圖らずも呼び戻されて、革命資金をではなく革命精神のみを土産にして、外國から歸つて來た。さうして推されて臨時大總統の榮位に就いたのである。

——この經過のみを考へても、中國革命の性格が瞭然としてゐるのではないであらうか。わたくしは、それを「横から」の革命——ドイツ語で云へば Revolution von seiten——と名づけて、「上から」および「下から」の革命と區別することができると思ふのである。

中國の國民革命のこの性格は、孫文の辛亥革命後に嘗めた苦汁と彼が計つた革命理論の具體化とにおいて、更に明瞭に看取せられる。外國から革命精神のみを土産に歸國した孫文は、臨時大總統に推戴されたと云ふものの、新中國建設の運営の地盤を中國社會の母胎の中に見いだすことはできなかつた。彼は畢竟、そ者だつたのである。だから新政府の運営は間もなく袁世凱によつて行はれねばならなかつた。孫文の大總統の辭職は云はば新政府から弾き出されたことを意味してゐる。それは彼の三民主義の眞意を了解する者が、舊官僚は元より年來の同志の間にも、殆んど全くなかつたがためである。袁世凱その他の反革命的運動との争闘の過程において、彼は自己の革命理論が中國の現實と結び、中國の既成勢力に取り上げられて現實の力となるべき方途を、自ら考究しなくてはならなかつた。他方、歐洲大戰の勃發は、ヨーロッパの社會や思想に中國の將來を望み得た孫文

に深い反省を要請したのである。帝國主義の毒牙はヨーロッパに平和を齎さないばかりか、東洋に向つていよいよ露食の歩を進めて來ることを、大戰後の國際情勢の間から觀取した彼は、革命理論を中國の地に着いたものにする必要を痛感した。「横から」の革命理論をば中國の傳統的な思想との關聯において鑄直し、革命運動をして中國の民衆の自然發生的な反帝國主義的な行動情熱と結びつかせることが、今や彼の最大の關心となつた。

知難行易説の唱道をはじめとし、次アジア主義の積極的な採用は、孫文の革命理論が以前の外來性を遊離性との抽象を脱皮して、中國の内部に運動の地盤を求めて具體性を獲得しようとしたことを示してゐる。革命理論は以前の「横から」の性格に止まることなく「中へ」這入り込むことが企圖されたのである。しかし孫文はこの理論の具體化を成し遂げたであらうか。民主主義の後期とわたくしが呼ぶ思想の展開が示してゐるやうに、中國の内部に地盤を求めて試みられた理論上の變化は、たしかに一面では、中國社會の現實との接近を物語つてはゐる。けれども、本質的な點から云へば、その理論は新しい形において「横から」の性格を再び帯びて來たと云はざるをえないのである。

儒教の教への批判的攝取による知難行易説の唱道は、中國人の革命情熱に對して自尊心を高め、西洋の覇道に換へるに東洋の王道を以つて世界に臨むと云ふ孫文の新しい革命理論は、中國人に對して世界的な使命感を喚起したにちがひない。中國の傳統思想は革命理論によつて否定されることによつて再び生かされ、革命理論そのものは中國人の情熱と結びつきはじめたのである。また大アジア主義の採用は、中國人に東亞民族的自覺を與へることによつて、ヨーロッパ社會に對抗すべき彼等の使命を氣付かせたにちがひない。これはたしかに理論が「横から」の外來的性格を破つて「内へ」と侵透し、内在的な根據を有ちはじめたことを示してゐる。この理論の展開

7) ここに東亞民族と云ふのは、高田保馬博士の概念に従つてゐる。

の故に孫文の理論は正に現代的意義を有つ東亞民族の貴重なる思想的紀念物であるのでなければならぬ。しかしながら、他面においては、對西洋的な自覺の高まりは、ソヴィエトとの連繫論と密接に結びついてゐたと云ふ事實に對して、我々は目を覆つてはならない。反帝國主義的な中國民衆の民族意識は、さうして又孫文の革命情熱は、今やソヴィエトの援助の腕に身を投じようとするのである。第三國際の代表者の甘言は、中國の傳統に共產主義的な思想を藏してゐることを指摘することによつて、中國人の自尊心を探り、その間に乘じて中國の赤化の野望を遂げようとした。孫文は近世のヨーロッパへの信頼を裏切られた困憊した身をソヴィエトの援助によつて支へ、さうして反帝國主義的鬭争を共に展開することによつて、中國民族の解放を圖らうとした。國民黨改組後の中國國民革命の相はこの新しい方向轉換を示してゐる。しかしそれはこの革命の「横から」の性格の蟬脱ではなかつた。寧ろそれは新しい形の「横から」の性格の獲得であつたのである。

かくて、孫文の革命運動は、ヨーロッパの國民革命と比較するとき、終始一貫して「横から」の性格を有つてゐた、と結論することができる。

五

孫文時代の中國國民革命の「横から」の性格は、ただ孫文時代にのみ見られるにとどまらず、彼以後の中國國民革命の本質的な性格となつてゐる。蔣介石の擡頭は中國における資本主義の成熟を背景として有ち、それはアンダサクソンの金融資本の恩恵に浴してゐる。蔣介石が、孫文の晩年とちがつて、再びヨーロッパとの提携において、さうしてその限りにおいてはソヴィエトおよび中國共產黨との敵對に於いて、國民革命を續行して來たことは、人の知るところである。ここでも「横から」の性格はきわめて顯著である、と云はねばならぬ。中國共產黨

がソヴィエトの直接の觸手であることは云ふまでもない。蒋介石時代の中國國民革命の孫文時代と異なる特色は、孫文時代には「横から」の社會思潮がとにかくにも孫文の人格において統一されてゐたに反して、中國民族内部の階層の間にそれぞれの内應點を見いだして、「横から」の性格が遂に中國民族の分裂を助成してゐた、と云ふ點にある。蒋介石の獨裁權力の強化は全體主義の影響と見らるべきである。さうして滿洲事變以後の情勢は、大東亞日本が更に「横から」這入り込んで、中國國民革命の性格をその本來の色彩に従つて一層濃厚に色どつてゐることを示してゐる。今や世界の社會思潮は集つて中國にあり、その國民革命の成否を妊んで互に争闘し、内にまた外に、苛烈なる總力戰が戦はれてゐる。このことは、中國國民革命の「横から」の性格を以つてはじめて十分に説明しうべき事態であるのでなければならぬ。バルカンはヨーロッパの政治争闘の噴火口であると云はれる。だが眞の世界の政治争闘の噴火口は中國國民革命そのものである。

中國國民革命の性格が「横から」として特徴づけられるにしても、それは中國民族内部に全然發動點を有つてゐない、と云ふ意味ではない。孫文がいかにモダン・ボーイであり、中國社會の傳統に脊を向けることによつてのみ彼の革命理論を構想しえたと言つても、彼は本來コスモポリタンであつたのではなく、中國民族の前途を己れの運命として深憂する中國人であつた。革命の情熱は中國民族の奥底から燃え立つてゐたのである。ただその情熱に方向を與へる革命の理論が外來的であり、中國の現實との結合點を有たぬ遊離性を有つてゐたと云ふ意味において、彼に率ゐられた革命が「横から」の性格を有つてゐた、と云ふことができるのである。「横から」の性格は、正しく云へば、内から外へ出て再び外乃至は横から内へと還歸するところに現れるのである。「横から」の性格が本來内からの發動點を有てばこそ、中國革命が國民革命とし名づけらるべき所以のものがある。孫文以後、

革命のこの性格が中國は分裂しはじめたと云つても、それは却つて中國革命に統一的な發動點があればこそその分裂であることが銘記される必要がある。

かく見れば、「横から」の中國革命の性格の歸趨も亦おのづと明かになるのではないであらうか。中國革命が民族内部に發動點を有ちながら「横から」の性格を本質的にそなへ、その結果、民族の分裂を招いてゐるとするならば、國民革命の成否は、民族の發動點の自覺と「横から」の諸理論の慎重なる検討の結果得らるべき、發動點との本質的合致とに係つてゐる、と云はなければなるまい。云ひ換へれば東亞民族としての中國人の民族的自覺と東亞民族解放の「横から」興へられる革命理論の中から眞に民族的自覺に合致するものを選び出すことによつて、中國國民革命は、その本來の「横から」の性格の線に沿つて、成就されるのではないであらうか。大東亞戦争において我國が世界に示してゐる戦果や日華新條約の精神や大東亞會議の事實は、中國國民革命の前途について、中國民族に深刻なる自覺と考慮とを要請するものでなければならぬ。

(昭和十八年十一月十八日)